

全学でとり組んだ専門職連携教育 2021 第2報

—IPEの実装 IPW 演習 I を終えて—

Interprofessional education incorporated in Nagano University of Health and Medicine 2021, Part II: IPE Implementation

大町 かおり^{1*} 外里 富佐江² 宮越 幸代³ 山本 良彦¹

桑原 良子³ 宮脇 利幸² 井部 俊子³

¹ 長野保健医療大学 保健科学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻

² 長野保健医療大学 保健科学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

³ 長野保健医療大学 看護学部 看護学科

要旨：長野保健医療大学は、2021年に保健科学部と看護学部の全学生が合同で学ぶ専門職連携教育（IPE：Interprofessional education）を実施した。IPEを全学で実施するに先立ち、全学の教職員を対象とした研修会を4回開催した。本稿では第2報として、第4回研修会の内容を報告した。第4回研修会では、IPEの準備研修をしたのち、専門職連携教育実践（以下、IPW：Interprofessional Work）演習Iを両学部合同で実施したプロセスと成果を報告した。IPW演習Iの授業運営とスケジュール、事例検討、発表会、ファシリテーターのかかわり、さらにIPW演習Iの実施によってどのような成果を得たかについてまとめると共に、成績評価の構成について詳述した。

キーワード：専門職連携教育（IPE）、専門職連携教育実践（IPW）、ファシリテーション

1. はじめに

「全学でとり組んだ専門職教育」の第4回の研修会では、IPW演習I（3年次前期）の授業準備、実施、成績評価について報告し、今後の課題についてディスカッションが行われた。本稿ではその記録と研修会における参加者アンケートの結果について「全学でとり組んだ専門職連携教育 2021 第2報 IPEの実装 ～IPW演習Iを終えて～」として報告する。

2. IPW 演習 I の授業運営

IPW演習Iは、「地域における保健医療福祉の場を想定し、全学部の学生（3年生）でグループを編成し、多職種連携について事前学習、課題の設定、チームワークを意識しながらチームの目標に向かっていくプロセスを相互に学びあう」

ことを目標とした。5つの事例をペーパーバイシメントとして提示し、保健科学部と看護学部の学生が、これまで得た知識や実習での経験をもとに、自分の職種の役割を意識しながらグループで事例のゴールを模索するという、実践的な演習科目である。

2-1. 対象とファシリテーター

対象は、本学3年次、理学療法学専攻45人、作業療法学専攻45人、看護学部83人の合計173人の学生であった。グループは、理学療法学専攻から2～3人、作業療法学専攻から2～3人、看護部から4～5人で、1グループが8～9人となるように構成し、全20グループとした。

1グループに対してファシリテーターとして1人の教員を配置し、グループワーク時のファシリテーションおよびグループ形成を促した。ファシリテーターは、各学部から学生の比率と均等になるように配置した。

*e-mail: ohmachi.kaori@shitoku.ac.jp

（受付日：2021年12月22日／受理日：2022年4月28日）

2-2. 授業運営のための準備

IPE 関連科目代表者会議（定例会議 2020 年 9 月から月に一度開催）において IPW 演習 I の科目担当者 3 名（大町、外里、宮越）が 2020 年 12 月より会合をもち、授業資料（学生用・ファシリテーター用）、成績評価方法の検討を行った。

検討内容は全教職員を対象とした研修会で報告した（第 1 報 表 1：IPE 研修プログラム参照）。

2-3. 教材と手引き

①学生用教材：ワークブック（授業目標、スケジュール、グループ配置、事例、リフレクションペーパー、発表会資料、等）を作成した。

②教員用資料：ファシリテーターの手引き、教員評価用資料（グループワーク用、発表用、等）を作成した。

③その他：発表会に向けてのレジюме作成、ファシリテーターおよび会場係の役割説明動画の作成、授業や発表会時の感染症対策、ワクチン接種後の学生と教員の体調不良者への対応の検討をした。

2-4. IPW 演習 I の授業スケジュール

8 限分 1 単位の授業は、2021 年 6 月の毎週水曜日の 1、2 限に連続して 4 回実施した。

ファシリテーターは基本的に 2 回目～4 回目での参加とした。

1 回目：授業オリエンテーション、事例紹介、グループメンバー顔合わせ

2 回目：対象事例の理解と考察（個人～グループ）

3 回目：対象事例が目指す目標（グループ）の検討、発表準備

4 回目：グループ発表会（事例に対する支援目標と質疑応答）

2-5. 課題および発表と成果物

担当事例に対してグループで支援目標を検討し発表することを課題とし、日々の学びについて振り返りとしてリフレクションペーパーを個人とグループでそれぞれ授業終了後に提出する（4 回）こととした。

成果物は、リフレクションペーパー、グループ発表レジюмеおよび発表および個人のワークブックとした。

①課題（グループ討議）

以下の 5 事例を提示し、4 グループずつで同一事例に取り組んだ。（詳細は資料 1）

事例 1. まもなく退院予定の今井さん（脳梗塞）

事例 2. 自宅で過ごしたかったがやむをえなく入院した松本さん（アルツハイマー型認知症）

事例 3. 少しずつ症状が進んでいる戸隠さん（筋萎縮性側索硬化症）

事例 4. 成長期で反抗期なあゆみさん（二分脊椎）

事例 5. 帰ってからのひとり暮らしが不安な乗鞍さん（人工骨頭置換術後）

各事例に、共通する設問を以下のように設定した。発表は設問をもとにレジюмеを作成し行った。

- ・当事者の気持ち・困っていること
- ・当事者への支援目標
- ・事例に関連する職種とその職種の強み
- ・事例に必要な職種間の連携項目
- ・グループワークの振り返り

②発表会

同一事例を検討したグループが 2 グループずつとなるように編成し、1 会場を 10 グループとして 2 会場で発表会を行った。ファシリテーターは担当グループの発表会に参加し内容の評価を実施した。

【グループ発表】

レジюме：担当事例に対し、「設問」ごとに、各グループで A3 サイズ 1 枚にまとめ、事前に提出してもらい発表時にはレジюме集として印刷した。

③成果物

【リフレクションペーパー】

下記の項目について、個人およびグループの振り返りを課した。

〈個人〉

- ・あなたは自分の意見をどの程度話すことができましたか
- ・あなたはメンバーの意見をどの程度きくことができましたか
- ・グループの話し合いを発展させることができましたか
- ・グループでコンセンサスを得るために役立った発言にはどのようなものがありましたか
- ・その他、気づいたこと、感じたことなどを書

いてください

〈グループ〉

- ・チーム形成と協働
- ・メンバー間の相互理解
- ・対象者中心の視点・姿勢

【ワークブック〈個人〉】

授業の開始時より、授業の手引きとして用いていたワークブックには、グループワークをする前の個人の考察や検討内容を記載するページを設けた。また、発表会を経て、授業全体から得られた知見等をまとめ、授業全体を総合的に振り返って最後に提出する課題とした。

2-6. 成績評価の方法と評価表

IPW 演習Ⅰの授業目標に従い評価を行った。具体的には、グループワークを進める中で醸成されるチームの課題遂行プロセス、学修目標に対応する成果物、ファシリテーターおよび科目担当者の評価で構成される（詳細は資料2）。

【学修目標と成績評価方法】（評価基準と比率）

評価基準1. 専門職が多職種で連携した医療による支援目標について事例を通して分析し、自職種の役割と連携方法について具体的に説明することができる（自己内での理解とその表明）。

グループダイナミクス形成のプロセスと、担当のファシリテーターが記録した授業日ごとのリフレクションペーパーを3人の科目担当者がそれぞれに評価し、その平均を点数化したものと、個人のワークブックをもとに担当のファシリテーターが評価したものを統合して評価した。

評価基準2. 専門職連携について、多様な事例をもとに意見交換し、他職種の役割と連携方法について具体的に説明することができる。（グループ内での意見交換と相互理解）

グループダイナミクス形成のプロセスについての振り返りとして、担当のファシリテーターが記録した授業日ごとのリフレクションペーパーを3人の科目担当者がそれぞれに評価し、その点数を平均化して評価とした。

評価基準3. 医療専門職が多職種で連携・協調するための意見交換を行い、合意形成した具体的な支援目標を説明することができる。（合意形成による支援目標の決定とその説明）。

支援計画における目標設定に対して、グループで作成した発表資料（レジюме）およびグループ発表を成果物として、担当のファシリテーターが評価をし、3人の科目担当教員は全グループの評価を行った。それぞれの評価はグレードで行い、グレードを数値換算した後に平均値をグループの評価とした。

評価基準4. 事例のグループダイナミクスのプロセスを通して振り返りができる。

（グループワークの過程のリフレクション）

担当のファシリテーターが記録した授業日ごとのリフレクションペーパーを3人の科目担当者がそれぞれに評価し、その点数を平均化したもので評価した。

3. 授業運営の振り返り

3-1. グループメンバーの構成について

昨年までのヒューマンケア論（1年次）およびIPW 論（2年次）のグループメンバーと重ならないよう、新しく編成した。グループワークでは、意思疎通の重要性や自身の成長への気づき、視野や考え方の広がり、自職種の誇りや他職種の尊重を意識できたなどのポジティブな記述が認められた。次年度IPW 演習Ⅱ（4年次）のグループ編成を検討する際の参考にできるものと思われる。

3-2. 教材の事例設定について

IPEを実践する大学間で意見交換を行うIPEの研修では、教材の事例（模擬症例）について一部の学部・学科の学生から「自職種ができることが少ない」、「考え付かない」と指摘された経験が披露されることがある。本演習においては、とりわけ「適切だった」という意見はなかった一方、職種の偏りや教材の不備、改善を指摘する意見はなく、意見交換するための事例への抵抗感はなかったと考える。

3-3. グループ発表会

同一事例を検討した他のグループから多様な視点や解釈があることを学び、事例のポジティブな側面や「人」としての側面をみる重要性に気づく機会となっていた。会場収容力や時間の

都合上、2会場で同時開催したが、準備や各グループの発表時間・コメントや評価の時間の不足、学生による運営への不慣れを伺わせる指摘があった。互いの学びを分かち合う学習の意義が確認できた一方、その学習効果をより発揮するための共有方法や発表会の運営について見直す必要があると思われる。

発表会では、何をとりあげ、どうフィードバックするかは、今後の科目運営上の課題である。今回、グループのチーム形成の過程を全体で共有し、振り返る機会は設けなかった。しかし、個人の振り返りでは、メンバー間の葛藤（わだかまり）を自覚したままであったり、自身の課題が漠然としたままの学生もいたため、IPW 演習Ⅱでは IPW 論で学んだグループダイナミクスや対立への対処、チーム形成などを、自分たちの経験に引き付けて考えられる機会を段階的に持てるとよい。たとえば、自身の意思を表現する力や勇気の乏しさを、学科・専攻の構成人数の偏りとして指摘する者がいた。これは IPW 論のグループワーク後にも認められた意見である。しかし、学生には臨地の実態に合わせてより現実的に自職種や個人の力を発揮する必要がある、自らも養う努力を今後、期待したい。3年次後期からの実習や専門的な学習をさらに深めていく中で、自職種の強みや独自性を知り、「背景も構成人数も異なる職種が連携する意義」を実感しつつ、4年次の IPW 演習Ⅱでは、それぞれの強みや発言力を表現できる設定を意識的に組み入れていく必要がある。

3-4. ファシリテーションについて

今回、全学で初めて取り組む演習にあたり、ファシリテーターの詳細な介入方法に対する申し合わせはしていなかった。学生からファシリテーションに対する具体的な指摘はなかった。一方、グループメンバー間の分担や時間の使い方、悪さ、予習の計画性のなさや不十分さ、リーダーシップの不十分さ、学科を超えた意思疎通の未熟さを指摘する記述が複数あり、その数にはグループ間の格差が認められた。グループ間の学習効率や学習効果の違いへの影響が考えられるファシリテーションについては、ファシリテーター自身の感想・意見等も基に、次年度は

具体的に明示し、グループ間の格差を軽減できる方策が必要である。学生の記述をもとに「ファシリテーション」の検討事項としては、次の4点があげられる。

- ・アイスブレイクなどの学科を超えた緊張感の解放の設定
- ・演習時間内は意見交換に集中できるような運営への助言
(計画的な予習の助言や情報不足部分の補足や指摘、職種ごとの意見交換に偏り過ぎない時間配分など)
- ・効果的なリーダーシップ、メンバーシップの促進
- ・「葛藤」などに対する個人およびグループでの省察への関与

4. 第4回研修会の内容と評価

第1回から3回までの研修会時に行ったアンケートと同様の項目で教職員の参加者に対して質問紙調査を行った。

アンケートに回答された人数は48人であり、結果は、5の「とてもそう思う」、4の「少しそう思う」を総合して「そう思う」とした場合、回答者の比率は、「研修の内容は理解できたか」75%、「研修は期待やニーズに合っていましたか」62%、「研修の資料は役に立ちましたか」71%、「研修で得た知識やスキルを活かすことができますか」64%、「研修時間の長さは適していましたか」63%、「教室の環境は快適でしたか(室温、座席等)」81%であった(表1)。

その他に自由記述では、開講前に使用する学習ツール「TEAMS」で使う機能の事前周知(メッセージ交換、会議、ファイルの共有など)、演習時間内にネット検索等が集中することによる回線混雑の対策(計画的な予習や準備を含む)の必要性が指摘された。また「様々な課題はあるものの、マイナーチェンジを行いながらも大きな方針は変えることなく数年継続して行うことが重要」という意見もあった。

第4回の研修会では、IPW 演習Ⅰの授業の実践報告であったため、直接かかわった教職員には理解がしやすかったがそうでなかった参加者には答えにくいものだったかもしれない。

表1 研修会（第4回）アンケート調査結果

項目	第4回 n=48			
	中央値	最小値	最大値	そう思うの 回答者割合(%)
研修の内容は理解できましたか	4	2	5	75
研修は期待やニーズに合っていましたか	4	2	5	62
研修の資料は役に立ちましたか	4	2	5	71
研修で得た知識やスキルを活かすことができますか	4	2	5	64
研修時間の長さは適していましたか	4	1	5	63
オンラインでの研修は効果的でしたか	—	—	—	—
教室の環境は快適でしたか（室温、座席等）	4	3	5	81

注.5段階のリッカートスケールの質問項目

（5=とてもそう思う 4=すこしそう思う 3=どちらでもない 2=あまりそう思わない 1=全くそう思わない）。
そう思う（5=とてもそう思う+4=すこしそう思う）を「そう思うの回答者割合」として人数を%で示した。

5. まとめ

IPW 演習Ⅰでは、①IPW 論で学んだIPW の基本的な原理やチーム形成のプロセスを事例の検討を通して経験し、互いを知り、学び合う意義が実感できること、②各自がよりよいIPW に向けた課題や葛藤を意識でき、次なるIPW 演習Ⅱに向かってより具体的な関心をもって日頃の学習に取り組む動機につながることを目標であった。今年度のIPW 演習Ⅰとしての目標はほぼ達成された。次年度以降のIPW 演習Ⅱ、及びより効果的な次年度3年次生のIPW 演習Ⅰを開講するための具体的な示唆が得られたと考える。

なお、本学におけるIPEの実装は、授業に関わった教員と、事務職員の細やかな配慮と実働により、初回の授業を滞りなく完了することができた。今後もこの相互の協力体制は重要になると思われる。

（2021年度のファシリテーター担当者：敬称略、担当グループ順）

萩原啓文、水寄知子、鈴木真理子、下田浩一、栗林美智子、田中高政、福谷保、春原るみ、林かおり、奥原香織、熊本圭吾、坂口けさみ、内田美恵子、赤羽勝司、北澤一樹、川崎千恵、横関祐子

【資料1：事例集】

(名前や内容は教材として作成した架空のものです)

【事例1】まもなく退院予定の今井さん（脳梗塞）

今井より子さん。78歳の女性。

もともと専業農家の主婦として元気に生活していた。町内会の婦人部の部長をするなど、活発で明るい人柄である。今回の病気になるまでは、毎日のように息子や孫息子と一緒に家業である『すいか栽培』をおこなっていた。

ある晩、なんとなくめまいがして早めに就寝。次の朝、目が覚めると起き上がれない。身体の右半分が自分の体ではないように力が入らなかった。助けを呼ぼうとしたが、思うように声が出なかった。起きてこないより子さんを心配した息子さんが様子を見に来てあわてて救急車を呼んで、入院。脳梗塞と診断された。梗塞巣は左中大脳動脈領域。

入院後も病状はしばらく悪化した。入院後すぐにリハビリが開始されたが、右半身はほとんど動かなくなった。最初の病院から回復期リハビリテーション病棟のある病院に転院し、さらに2か月リハビリをがんばった。左足を踏ん張って、なんとか車椅子に乗り移れるようになった。

今朝「そろそろ退院ですよ」と主治医に言われた。びっくりした。まだ自分で何もできない。トイレの時だって看護師さんと呼んで、看護師さんがポータブルトイレを持ってきてくれて、手伝ってくれている。こんな状況で退院してどうするんだ。そもそも、今は『すいかの出荷』はいちばん忙しい時期で、家族は迷惑をかけられない。きっと、自分になんかかまっていられないはず……。今井さんは途方にくれている。

【事例2】自宅で過ごしたかったがやむをえず入院した松本さん（アルツハイマー型認知症）

松本きみ子さん。83歳の女性。

若いころ、松本さんは市役所で勤務をしていて、結婚後は専業主婦となった。子育てに生きがいを感じ、世話好きだった松本さん。息子2人が独立した後は、夫婦2人で暮らしていたが、7年前に、夫が大腸がんで他界し、独居となった。次男夫婦と同居した時期もあったが長続きはしなかった。

2年前、転倒により利き手である右手を骨折したことをきっかけに、ホームヘルプサービス（居宅介護）の利用を開始したが、「ヘルパーが物を盗む」と長男に話し、骨折は完治していなかったにもかかわらず、「もう良くなったから」と自分で勝手にホームヘルプサービスを断った。長男がヘルパーを断った理由を尋ねると、「親を信じられないのか」と怒った。

1年前、次男に対しても、もの盗られ妄想が見られ、長男が認知症専門病院（A病院）への受診を勧めたが「気遣い扱いするのか」と怒って受診を拒否した。

半年前に、やっとA病院を受診し、アルツハイマー型認知症と診断され、治療剤（ドネペジル）が開始となった。その後経過を観察していたが、松本さんがひとり夫の墓参りに行ったときに道に迷い、警察に保

護されたため、家族が独居の限界を感じ、行動心理症状の改善を目的にA病院に入院することになった。

入院後、松本さんは、「食事は食べたっけ?」「今、何時?」という質問を何度も繰り返すこと、声が聞き取りにくいようで、相手に顔や耳を近づける行動をとったり、会話が噛み合わないことから、周囲の人（一部）から距離を置かれていた。このような状態が続いていたある日、院内の食堂で患者さんに「あっちに行つて」と言われ、松本さんは怒りがおさまらなかった。

【事例3】少しずつ症状が進んでいる戸隠さん（筋萎縮性側索硬化症）

戸隠みさえさん。55歳の女性 主婦。

約1年前から右手の脱力に気づく。徐々に左手の力も入りにくくなり、また階段を上る時には下肢の力も入りにくく感じていた。脳神経内科を受診し、精密検査目的に入院した。診察上は四肢の筋萎縮、筋力低下、筋線維束性収縮を認め、筋電図検査では広範な神経原性変化を認め、筋萎縮性側索硬化症と診断した。

〈Phase 1 告知〉

医師は患者と夫に、進行性の疾患であり、また、治療法もほとんどない状態であるが、患者の状態（精神的ショックなど）をみきわめつつ、隠すことなく病名と予想される予後を説明した。患者は説明後、短時間泣いたが内容については「わかりました」という反応であった。特定疾患の申請後に唯一認可されている治療薬であるリルテックの処方を開始した。今後の療養でもADLの低下が予想された。

〈Phase 2 病状の進行（現在の戸隠さんのPhase）〉

6ヶ月後、四肢筋力低下は徐々に進行し歩行が困難となり、また在宅日常生活に介助が必要となった。呼吸機能検査、動脈血液ガスには異常なかった。夫はまだ仕事を持っており介護力に問題があり、本人はまだ病気の進行については完全には受け入れられていないようであった。医師は再度説明を行い、患者の理解を深めるようにした。患者はそれぞれの職種に対して予後などの質問をすることが多くなった。

【事例4】成長期で反抗期なあゆみさん（二分脊椎）

佐久あゆみさん。13歳 女児。

声が大きくあかるい性格で人懐っこい笑顔がかわいい養護学校の中学生。

二分脊椎で生まれ、生後3日で瘤閉鎖術、生後1週間で、水頭症に対し脳室腹腔シャント術（これまでにシャントの入れ替え2回）、IQ 80、膀胱直腸障害（自己導尿：これまでに尿路感染症を数回繰り返す。排便は週に一回浣腸、普段はオムツ）。神経機能残存髄節レベルはL3。通常は車椅子で移動しており、操作は自立している。入浴は軽介助。食事、整容は自立している。

現在、週に1度、外来でロフトストランド杖、短下肢装具を用いて歩行練習を実施している。来院時は母と一緒に通常の歩行練習をしようとしたところ、母からの「最近側彎が強くなってきたような気がする」「できればリハビリの回数を増やしてほしい」と言われた。本人はその話を聞いて「お母さんうるさいから、

もう今度から自分ひとりで（病院に）来る」「お風呂とかでも、『最近太ってきた』とか、『この骨が出っ張ってきた』とか、ほんとうるさい」と言いながらむっとしていた。

【事例5】帰ってからのひとり暮らしが不安な乗鞍さん（人工骨頭置換術後）

乗鞍勝江さん。79歳女性。

早朝の犬の散歩時に、新聞配達バイクに驚いた犬が暴走し、引きずられて転倒。疼痛ひどく倒れたまま動けず。後から来た車の運転手が倒れた乗鞍さんを見つけ、降車して救急車を手配。

そのまま当院へ入院。右大腿骨頸部骨折のため人工骨頭置換術施行。現在、術後5日目。術後経過は順調。

乗鞍さんは独居。夫とは10年前に死別。子どもは2人いるが、いずれも男性でひとり（55歳）は国外、もうひとり（53歳）は他県在住でいずれも未婚。入院中の犬の世話や着替えなどの生活の用意は、隣町在住の妹（75歳）がしている。術後の経過に問題はない。これまで気丈に一人暮らしをしていたが、家に帰ってからのひとりでの生活に不安を感じている。妹と暮らしたいと思っているが、妹は夫、娘夫婦、孫3人と同居しているため言い出せずにいる。

【資料 2-1】

IPW演習Ⅰ・成績評価表

班	学科・専攻	学籍番号	学生氏名	成績評価基準（％）		
	看護・理学・作業			30	30	40
【IPW演習Ⅰの授業目標】 地域における保健医療福祉の場を想定し、全学部の学生（3年生）でグループを編成し、多職種連携について事前学習、課題の設定、チームワークを意識しながらチームの目標に向かっていくプロセスを相互に学びあう。				グループダイナミックスにプロセスについて振り返り	支援計画における目標	グループ発表
学修目標	IPW演習Ⅰにおける到達目標					
1. 専門職が多職種で連携した医療による支援目標について事例を通して分析し、自職種の役割と連携方法について具体的に説明することができる。 （自己内での理解とその表明）	(1) 対象者について多角的に理解できる （人柄・病態・現在および今後の生活の困難さ・思いや願い・家族や主に関わる人の思いや願い、など）			リフレクション総合 10	ワークブック（個人） 10	
	(2) 自分の職種の専門性について理解し共有できる					
	(3)					
2. 専門職連携について、多様な事例をもとに意見交換し、他職種の役割と連携方法について具体的に説明することができる。 （グループ内での意見交換と相互理解）	(1) お互いに用いるツールの違いについて共有し理解できる			リフレクション総合 10		
	(2) 目標設定の過程（方法）および視点の違いについてお互いに理解しあえる					
	(3) 自分の職種の専門性についての気づきを共有できる					
	(4) グループメンバーおよびその他の職種の専門性及びその違いについて理解し説明できる。					
	(5) それぞれが考えた意見を統合しながら理解し共有できる。 （それぞれの考えの共通点・相違点を共有し、それについて議論をしながら共有できる）					
	(6)					
3. 医療専門職が多職種で連携・協調するための意見交換を行い、合意形成した具体的な支援目標を説明することができる。 （合意形成による支援目標の決定とその説明）	(1) 対象者の疾患・生活・人生の質を踏まえた目標を設定できる				発表資料（グループ） 20	グループ発表（グループ） 40
	(2) 対象者について課題だけでなく強みについても考えることができる					
	(3) 対象者について抽出した課題について優先順位を考えることができる					
	(4) 各職種の視点を共有した上でチームとしての思いを明確にし目標を説明することができる。（どうなっていてほしい、どうあってほしい）					
	(5) 各職種の対策の寄せ集めでなく、対象者中心の目標を立てることができる。					
	(6)					
4. 事例のグループダイナミックスのプロセスを通して振り返りができる。 （グループワークの過程のリフレクション）	(1) わからないことはわからないということができる（個人およびグループの雰囲気）			リフレクション総合 10		
	(2) 自分の意見に根拠を添えて説明でき、相手に伝わっているかを意識しながら発言することができる					
	(3) 議論が対立したり膠着した時に、まとめたり発展的に調整しようとするメンバーが自然に発生する					
	(4) チームとしての意見を確認しながら議論を進めて合意形成に努めることができる（中途半端に妥協しない）					
	(5)					
出欠および提出物等の特記事項						

【資料 2-2】

IPW演習Ⅰ・ファシリテータシート（1）

日付	担当グループ	出欠状況	担当教員名
6月16日		欠席者名：	
<p>【IPW演習Ⅰの授業目標】</p> <p>地域における保健医療福祉の場を想定し、全学部（3年生）でグループを編成し、多職種連携について事前学習、課題の設定、チームワークを意識しながらチームの目標に向かっていくプロセスを相互に学びあう。</p>			
<p>【担当グループのチーム形成状況】</p> <p>：該当する状況を選択し、記号に○をしてください（複数選択可能）。</p> <p>i.形成期（forming）：チームの課題は理解しているが、お互いのことをよく知らない時期。 ii.混乱期（storming）：メンバー間で考えや価値観がぶつかり合う（嵐のような）時期。 iii.統一期（norming）：メンバーがお互いの考えを受容し、関係性が安定する時期。 iv.機能期（performing）：チームに一体感が生まれ、チームの力が目標達成に向かう状態。</p>			
<p>【ファシリテーションによる介入の有無】</p> <p>あり ・ なし</p> <p>「あり」の場合は、どのような介入をされましたか？ そしてどのような反応がありましたか？</p> <p>【介入】</p> <p>【反応】</p>			
<p>【本日のファシリテーションでの気づき、等】</p> <p>・ 学生たちの様子：グループワーク時のよかった点</p> <p>・ 学生たちの様子：改善が必要と思われる点</p> <p>・ 他の教員とも共有したい情報（報告・提案・疑問、等）</p>			
授業担当者への希望など			

■IPW演習 I 2021・ファシリテータによる発表会評価■

■各グループの発表について

ケース1 (脳梗塞)	2班 発表資料	S・A・B・C・D	【理由等】	
	2班 発表	S・A・B・C・D		
	4班 発表資料	S・A・B・C・D		
	4班 発表	S・A・B・C・D		
ケース2 (認知症)	6班 発表資料	S・A・B・C・D	【理由等】	
	6班 発表	S・A・B・C・D		
	8班 発表資料	S・A・B・C・D		
	8班 発表	S・A・B・C・D		
ケース3 (ALS)	10班 発表資料	S・A・B・C・D	【理由等】	
	10班 発表	S・A・B・C・D		
	12班 発表資料	S・A・B・C・D		
	12班 発表	S・A・B・C・D		
ケース4 (二分背椎)	14班 発表資料	S・A・B・C・D	【理由等】	
	14班 発表	S・A・B・C・D		
	16班 発表資料	S・A・B・C・D		
	16班 発表	S・A・B・C・D		
ケース5 (人工骨頭置換術後)	18班 発表資料	S・A・B・C・D	【理由等】	
	18班 発表	S・A・B・C・D		
	20班 発表資料	S・A・B・C・D		
	20班 発表	S・A・B・C・D		

担当グループ		教員氏名
【学修目標】	発表および質疑応答の様子と発表資料等の発表時資料は学修目標の3に該当します。	<p>(1) 対象者の疾患・生活・人生の質を踏まえた目標を設定できる</p> <p>(2) 対象者について課題だけでなく強みについても考えられることができる</p> <p>(3) 対象者について抽出した課題について優先順位を考えることができる</p> <p>(4) 各職種の視点を共有した上でチームとしての思いを明確にし目標を説明することができる。(どうなっているほしい、どうあっているほしい)</p> <p>(5) 各職種の対策の寄せ集めでなく、対象者中心目標を立てることができる。</p> <p>(6) その他</p>
	3. 医療専門職が多職種で連携・協調するための意見交換を行い、合意形成した具体的な支援目標を説明することができる。(合意形成による支援目標の決定とその説明)	
成績基準	S: かなり優れている (独自の視点、うなるほどの出来栄) A: 優れている (何らかの工夫がみられる、など) B: 標準的 (書式・発表・質疑応答などの基準を満たしている) C: かなり合格 D: 不合格 (多少の訂正で合格になる)	
発表会の感想等 (全体)		
担当グループについて (特記事項)		
その他		

* 参加されたグループ発表について評価していただき、授業終了後に大町にご提出ください。

【資料 2-4】

IPW演習Ⅰ・ワークブック評価シート（個人）

担当グループ	専攻	学生氏名	担当教員名
	看護・理学・作業		
<p>【IPW演習Ⅰの授業目標】</p> <p>地域における保健医療福祉の場を想定し、全学部の学生（3年生）でグループを編成し、多職種連携について事前学習、課題の設定、チームワークを意識しながらチームの目標に向かっていくプロセスを相互に学びあう。</p>			
<p>【学修目標および到達目標から見た個人レベルでの課題の理解と考察】</p> <p>1. 専門職が多職種で連携した医療による支援目標について事例を通して分析し、自職種の役割と連携方法について具体的に説明することができる。 （自己内での理解とその表明）</p> <p>1) 対象者について多角的に理解できる （人柄・病態・現在および今後の生活の困難さ・思いや願い・家族や主に関わる人の思いや願い、など）</p> <p>2) 自分の職種の専門性について理解し共有できる</p> <p>3) その他、何らかの優れた気づきがある</p>			
成績基準	<p>S：かなり優れている（独自の視点、うなるほどの出来栄え）</p> <p>A：優れている（何らかの工夫がみられる、など）</p> <p>B：標準的（書式・発表・質疑応答などの基準を満たしている）</p> <p>C：かろうじて合格</p> <p>D：不合格（多少の訂正で合格になる）</p>		
レポート成績 （該当するものに○をつけてください）	S ・ A ・ B ・ C ・ D		
判定理由 および備考			
授業担当者への 希望など			